◆ 講 演

USA文学を面白がっていたらメキシコに行き着いてしまった

青 山　　南

司会　本日はラテンアメリカ研究所主催、アメリカ研究所および文学部文学科英米文学専修共催の講演会にようこそお運び下さいました。

早速、青山南先生をご紹介します。1949年福島のお生まれです。肩書としては翻訳家にしてエッセイストと申し上げるのが一番適切でしょう。配布資料の著訳書リスト（p.50参照）、本学図書館にあるものだけでも、70年代から80年代にかけてはもっぱら翻訳家として、90年代に入るとエッセイストとして旺盛に活躍しておられる移り変わりが良く分かります。現在は今話題の二刀流、そして母校早稲田大学の教授もなさっています。1970年代は『早稲田文学』の編集長を務めておられました。今日その当時『三田文学』の編集長をしておられたアメリカ研究所の生井英考先生も来場されています。つまり、大学を拠点とする日本の代表的文芸誌の双璧、その一翼を担っておられたということです。

さて青山先生の初体験は2007年。ここでいう初体験とは初めてメキシコにいらしたことを指します。2年後の2009年にキューバへお出掛けになりました。先日刊行された新書は2010年のメキシコ留学記ですが、2016年にもメキシコ短期留学をなさっています。しかしみなさんここで先ほどのリストをご覧ください。我々の調査からもれているものもあるかもしれませんが、最初の訳書として少なくともこのリストに拾えたのは、ジョン・ドス・パソスの『さらばスペイン』。となると、実は最初からスペイン語の世界とご縁があったのではないかとわかります。しかもキャサリン・アン・ポーターという女性記者・作家にも早くから注目しておられました。この人物はメキシコ革命の報道に携わっていたのです。ですからメキシコともかなり早くからご縁があったようにお見受けします。ともかく最近は本当にメキシコに入れ込んでおられるそうで、この11月初めには代官山の「死者の日」のイベントにまで参加されたと聞いています。では、皆さんお待ちかねでした。

青山　ただいまご紹介いただきました青山です。こんなにたくさんお集まりいただけるとは思っていなかったので、みなさん、ほんとうに今日はありがとうございます。大学の授業でもぼくはいまは大きな講義は全部お断わりして本当にこぢんまりとした授業しかやっていないので、

こんなにたくさんの方を前にしてお話しするのは久しぶりです。

今日、ここに呼ばれたのは『60歳からの外国語修行――メキシコに学ぶ』という本をこのほど出したからで、アメリカ合州国の文学をやっている青山がどうして急にスペイン語を勉強しにメキシコに行ったのか、それを話してほしいと声をかけられたわけです。しかも、60歳を過ぎてからですから、いったいどういうことなんだ、ということです。はい、行ってきました。厳密には61歳でしたが、ほぼ10ヶ月いました。メキシコ第二の都市のグアダラハラにあるグアダラハラ大学に、この立教大学のラテンアメリカ研究所みたいなものになるんでしょうか、CEPEという外国人学習センターなるものがあることをインターネットで知り、そこに登録しました。ホームステイをすることにして、下宿先もCEPEに用意してもらい、勉強してきたという格好です。2010年のことでした。

授業は午前9時から始まり、1コマが1時間半です。それを午前中2コマ受けました。授業が終わると12時10分で、くたくたになりました。家は、学校から歩いて10分くらいのところにありましたが、帰ってくると、初めのころはくたばって寝てましたね。メキシコのお昼のご飯は2時から2時半ぐらいということになってますから、それまでベッドでバタン。そのうち「ミナミ！」と起こされて、ご飯の時間です。面倒見てくれていたのは70歳と75歳の姉妹です。ふたりとも食が細いので、ぼくもなんとなくそのペースにしたがうようになり、思いがけずダイエットになりました、当初は。そのうち、2コマの授業にも慣れてくると、タコス屋に寄ってタコスを食べてから帰宅し、そしてまたご飯を食べるという展開になっていきましたから、ダイエットできたのはつかの間のことでしたが。

メキシコに行ったのは、それが2回目でした。ただ、1回目というのは、はたして1回というふうに数えることができるのか分からないぐらい、おそろしく短い大変な強行軍の旅でした。アメリカ西部のコロラド州のデンバーから車でスタートして、どんどん南のほうに下りてニューメキシコ州をぬけ、テキサス州に入り、国境を越えました。そしてメキシコに入ると、いっきにメキシコシティを目指したのですが、予約してある飛行機の関係で、許されている時間はわずか2日。なんとかメキシコシティに夕方に着くと、次の日の朝の飛行機でサンフランシスコに向かいました。

なんでそんなことしたのかというと、後ほど細かくお話しますけれども、アメリカの作家のジャック・ケルアックという作家に『オン・ザ・ロード』という代表的な作品があるんですが、それの新訳を僕が2007年に出したんです。それを記念して、ある雑誌が、その小説の中で主人公たちが車で走ったコースを走ってみようと企画してくれたんですね。その小説は、ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、北アメリカ大陸を車でがんがん走り回るのが魅力の一つになっている小説で、作品のほぼ終わりあたりでは、国境を越えてメキシコに入る。それを、小説通りのコースで追体験したという次第です。メキシコ国内は2泊3日みたいな体験でしたが、とてもエキサイティングでした。でも、わずか数日でしたし、メキシコシティにいた時間ときたら、じつに数時間といってもいいくらいで、メキシコシティでは夕ご飯しか食べてない。しかも、その夕ご飯も閉店間際の店であわてて食べたみたいなものでした。せっかく来たのになあ、という思いで引きあげてきました。

スペイン語圏のラテンアメリカには、その高速ドライブのメキシコの旅の数年後に、キューバに行きました。じつは、それまでずっと、NHKのラジオのスペイン語講座でスペイン語を勉強していたんです。でも、それはとても勉強と呼べるようなものではなくて、いつも最初の1ヶ月で挫折するという、まったく長続きしない、1ヶ月やってはやめ、つぎのクールでまた1ヶ月やってはやめ、という繰り返しをやっていました。そしてあるとき、どうして続かないのか、はたと気がついたんです。自分が怠け者であるのはたしかだが、それ以上に、生のスペイン語を聞いたことがないのが原因なのではないか、というふうに。みんながスペイン語をしゃべっている風景のなかにいたことがないので、世界にほんとうにスペイン語をしゃべってる人がいるという実感が湧いてこないのではないか、というふうに。よし、じゃあ、確認しにちょっと行ってみようか、と思いついて、キューバに行ったんです。

なんでキューバだったかというと、『ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ』という映画を見て感動していたからで、あそこに出てくる風景に心を惹かれてました。とくにハバナの海岸沿いの道、マレコンと呼ばれているところですが、そこを、あの映画を企画したライ・クーダーというアメリカのミュージシャンがサイドカーで息子を乗せて走っていく。すると、横から大きな波が打ち寄せてきて、飛沫がマレコンに降りかかる。ああ、あの飛沫にかかってみたい、という気持ちがありました。

キューバ専門の旅行会社に個人旅行の手配を頼むと、東のほうのサンチャゴ･デ･クーバでちょうど有名な音楽祭があると知りました。じゃあ、せっかくだからその音楽祭も見てみようかということで、10日ほどの旅がきまりました。

この旅は楽しかったし、おどろかされることがいっぱいでした。ハバナの中心街の建物たちのじつに味わいぶかい汚れっぷりにも、あとで野球談義をやっているんだと知りましたが、街の広場で何十人もの男たちが木に群がる鳥のようにピーチクパーチク朝から大声で議論しあっている光景にも、また、あちこちに落書きのようにゲバラの似顔絵があることにも、あらためて感動しました。サンチャゴ・デ・クーバでは、一組の男女が抱き合って踊るソンというダンスの存在を初めて知り、ゆるやかに踊るそのダンスの色っぽさにはすっかり魅了されました。それから、アメリカ文学をやっている者としては、キューバといいますとヘミングウェイという作家になじみのある土地でヘミングウェイの家もありますから、もちろんその広大な屋敷も見学してきました。かくして、旅の大きな目的であった、スペイン語をじっさいにしゃべっているひとたちのなかに身を置いてみたい、という願いはかなえられたわけですが、当然のように、NHKのラジオ講座の成果はまったくなく、もうすこしちゃんと勉強しないと、と反省しながら帰ってきました。

さて、本題は、アメリカ合州国の文学をやっているぼくがどうして急にスペイン語を勉強しにメキシコに行ったのか、というものです。ですから、今日は、ぼくがメキシコでどんなふうにスペイン語の勉強をしていたかということよりも、なんでUSAの小説とつきあっていたらスペイン語にぶつかってしまったのかという点について話をしていきたいと思います。

2010年にぼくがメキシコに10ヶ月行けたのは、大学から研究休暇をいただいたからです。同

僚に「メキシコに行こうかと思う」と言うと、おどろかれました。なんでメキシコ？　というふうに。なんでアメリカじゃないの？　あんたはアメリカをやってるんじゃないの？　というふうに。

ぼくはアメリカには旅行とか取材では何度も行ってはいますが、いわゆる留学体験というのはありません。だから、長期のアメリカ滞在というのをやってみてもよかったんですが、いまさらアメリカっていう気分も少なからずあり、ずっと気になっていたメキシコにスペイン語を勉強に行くという決断をしました。

ただ、ぼくの場合、メキシコが気になっていたといっても、ストレートにメキシコという国が気になっていたわけではありません。テキーラとかマヤ文明とか、マリアッチとか、あるいはディエゴ・リベラの壁画運動とか、メキシコ革命とか、そういったものに強い関心を持っていたわけではないんです。正直なところ、メキシコについてはろくに知らなかったといってかまわないでしょう。でも、非常に気になっていた。昔から気になっていた。なぜかというと、ぼくがUSAの小説に関心を持ちはじめたそもそもの初めから、メキシコがちらちらと姿を見せていたからなんです。

話はぐっとさかのぼり、ぼくが初めて読んだUSAの小説のことになります。高校2年生のときでした。スタインベックの『怒りの葡萄』です。1930年代の大不況の時代が舞台で、アメリカのど真ん中、恐ろしい砂嵐のなか、仕事のない貧しい農民たちが、仕事を求めてカリフォルニアを目指して苦難の旅をするという大作です。ぼくはそれをもちろん翻訳で、誰に薦められたわけでもなく読んだんですが、家の近所の小さな本屋で見つけました。ジャケ買いでした。表紙に惹かれて全3冊を買いました。角川文庫で、訳者は石一郎という人。もちろん翻訳を訳者で買うなんていうことも知らないし、訳者の名前も知りません。変な名前だなとちょっと思ったぐらいです。石ってあのストーンの石ですから。

なぜジャケ買いしたかというと、こういう3枚の絵が使われていたんですね。

角川文庫1956年版『怒りの葡萄』いずれも表紙はベン・シャーン作品

上巻『ウエストヴァージニア州スコッツラン』（1937年）

中巻『赤い階段』（1934年）

下巻『解放』（1945年）

ぜんぶ、ベン・シャーンの絵です。いま考えると、なんと素晴らしいセンスを角川文庫は持っていたのかと感心しますが、ベン・シャーンという画家の存在を知ったのはこのときが初めてでした。もちろんスタインベックという作家も知りませんでした。3枚の絵をしばらく本棚にならべてながめていたものです。というわけで、ぼくにとってのアメリカ小説とは、したがって、まずはスタインベックとベン・シャーンなんです。そこからはじまったと思っています。

『怒りの葡萄』には心動かされました。アメリカ小説とのラッキーな出会いだったと思っています。でも、この小説にはとくにメキシコは出てきてはいません。もし出てきていたとしても、こっちの印象に残るようなものではなかったということでしょう。メキシコに関係があるのは作者のスタインベックのほうです。そのことはずいぶん後になってから知ったのですが、振り返ってみて、そうか、『怒りの葡萄』の陰にはメキシコがあったんだ、と気づいたようなわけです。

『怒りの葡萄』がアメリカで刊行されたのは1939年でした。それは出た当初からおおいに話題を集めましたが、そのときのスタインベックはじつはすでによく読まれる作家になっていたんです。長いことそう読まれる作家ではなかったのですが、『怒りの葡萄』の4年前からよく読まれ、かつ売れる作家になっていました。4年前というのは1935年ですが、その年に刊行した*Tortilla Flat*という小説がスタインベックのキャリアにおいては転回点になります。

ぼくはこれを「トーティラ・フラット」と読み、そのように長いこと記憶していました。「トルティーヤ・フラット」と読めるようになるまでにはずいぶん時間がかかっています。でも、なにがメキシコなのかはもうお分かりになったでしょう、はい、メキシコの主食の名前が入った小説をスタインベックは書き、売れる作家になったんです。

なんでそんなタイトルになっているのかというと、これは地名です。小説の舞台が、カリフォルニアのモンテレーで、サンフランシスコの南に位置する海沿いの町です。スタインベックはここで暮らしていたんですが、当時のモンテレーはメキシコ人が非常に多くて、メキシコといってもいいような町だったらしい。そんなモンテレーの一角にトルティーヤ・フラット、まあ、アメリカ人がどういうふうに発音しているのかはちょっと分かりませんが、そういう名前の貧しい区域があって、そこを舞台にメキシコ系の少年を中心に話を進めていくというのがこの作品でした。スタインベックはドイツ系およびアイルランド系のようで、メキシコ系ではなさそうです。ですから自分のことを書いたというわけではなくて、自分が見てきた風景に、小さいときからずっと見ていた風景にインスパイヤーされて書いたのだと言っていいと思います。

『怒りの葡萄』を読んでアメリカ小説に目覚めたばかりの高校生のぼくには知るよしもなかったわけですが、スタインベックには、育った環境のせいもあったのでしょう、メキシコへの関心が早くから強く根づいていたということです。

その証拠に、*Tortilla Flat*を出して初めて本が売れたスタインベックはメキシコに出かけます。初めてのメキシコです。そしてメキシコシティにアパートを借りて半年ほど生活します。そこではディエゴ・リベラとも知り合いになります。メキシコには魅了されたようで、そのときにメキシコからアメリカの友人に宛てた手紙には、「ここではあまり仕事ができない。とにかく窓の外の風景が刺激的で、とても仕事ができない。きっとまたここには戻ってくる」と書いています。メキシコにぞっこんになってしまったのが見て取れます。そしてそれからスタインベッ

クはメキシコとの付き合いをぐいぐい深めていきます。

まず1941年、*The Forgotten Village*、「忘れられた村」という映画の脚本を書きました。監督はインディーズの、要するに独立系の、ハリウッドとは縁のない監督でハーバート・クラインという人で、メキシコの僻村を舞台にしています。まるで古代と変わらないような暮らしをずっと続けている村に現代の文化、この映画の場合は薬ということなんですが、医療のための薬が入ってきたらどうなるかということを、古くからのメディスンマン、つまり呪術師と対比させながら描いていく。登場する人間たちは全員素人の村人たちで、俳優はつかっていません。まさにインディーズらしい、低予算の意欲作です。YouTubeで観られますから、興味のあるかたはご覧になってください。脚本を担当したのですから、ナレーションはスタインベックが書いています。

そしてそのつぎは1947年、今度は*The Pearl*、「真珠」という作品を、小説と映画でほぼ同時に発表します。小説を書き、その小説も同時に映画化するというじつに挑戦的な試みです。映画を監督したのはメキシコ人のエミリオ・フェルナンデス、俳優でもあれば監督もするメキシコの映画界では大変に有名なひとのようですが、そのかれがこの映画を監督しました。スタインベックがGolfo de Californiaという、バハ・カリフォルニアの所にあるカリフォルニア湾ですね、Sea of Cortez（Cortés）っていうふうにもいわれているところですけど、そこの調査に出掛けたときに耳にした真珠採りの話を元にして書き上げたと言われています。ちなみに、Sea of Cortez（Cortés）の Cortésはスペインの侵略者、というかコンキスタドールの名前なので、のちにメキシコ政府がGolfo de Californiaに変えた、というようなことがウィキペディアに書いてありました。この映画、日本でも公開されたようですが、いまもYouTubeでフルで見ることができます。

そしてさらに、その*The Pearl*の準備で何年間もメキシコに通っているうちに、スタインベックはエミリアーノ・サパタの名前を知ります。いわずもがな、メキシコ革命で大きな役割を果たした人物ですが、かれについての映画を作らないかというふうに誘われます。スタインベックはきっと映画が好きだったんでしょうね、取材と調査に何年もかけて脚本を書き、*Viva Zapata!*という映画を完成させます。監督はエリア・カザン。1952年に公開されました。サパタを演じたのはマーロン･ブランドで、その年のアカデミー賞主演男優賞にノミネートされました。サパタのお兄さんを演じたのはアンソニー・クインで、その年のアカデミー賞助演男優賞を受けていますが、なかなか存在感のある演技をしています。そしてスタインベックは脚本賞にノミネートされました。日本では『革命児サパタ』というタイトルで公開されましたが、いまもDVDで安く観られます。

こんなふうにスタインベックは深くメキシコにコミットしていたわけですが、『怒りの葡萄』でアメリカ小説に開眼したときのぼくはそんなことはぜんぜん知らなかったのです。でも、いま思うと、遠くからメキシコがぼくをそっと呼んでいたのかもしれない、とそんな気がしないでもありません。

大学に入ると、すこし自覚的にUSAの小説を読むようになりました。でも、時代は1960年代で、当時アメリカで注目されていた文学といえば、アフリカ系の文学やユダヤ系の文学でしたから、ぼくの興味もいきおいそっちのほうに向いていき、ユダヤ系のフィリップ・ロスに夢中になり

ました。そんな流れから、後年、かれの『われらのギャング』とか『ゴースト・ライター』といった作品を翻訳することになるんですが、そのあたりにはメキシコ等の中南米は姿を見せていません。もっとも、そんなロスも、ずっとあと、2001年になると、60代のユダヤ系の大学教授が24歳のキューバ系の教え子の女子大生を誘惑する『ダイング・アニマル』という小説を書くことになるのですが。

ぼくがメキシコと思いもかけない出会いをするのは、大学院に入ってからです。大学院でぼくが研究の対象にしたのは、アメリカ南部の女性作家たちです。早稲田の大学院に入ったんですが、当時、早稲田では小説家の小沼丹さんが教えていました。小沼さんはイギリス文学が専門で、当時の早稲田にはアメリカ文学をやってる先生がいなくて、わずかにアメリカ演劇をやっている倉橋健さんがいるというぐらいでした。いまでも忘れないのは、入試の面接試験で小沼さんに「君はなにをやりたいのかね」と訊かれたときのことです。「アメリカ南部の女性たちをやりたいと思ってます」と答えると、「アメリカの南部の文学をやるんだったらフォークナーに決まってるだろう。なんで女なんかやるんだ」って言われてしまったのです。そこで、こっちは、ほとんど急場しのぎなのですが、フォークナーを理解するためにはまず南部のなんたるかを知る必要があると思いましたので短編を得意とした女性作家たちの作品をまずは読んでみようと考えました、とかなんとか答えたものです。でも、まあ、ほんとうを言うと、フォークナーは作品が多すぎてとても読み切れないだろうなあ、というなんとも情けない計算があったのですが。

それはともかく、USAの南部は昔から女性作家を多く産みだしているところで、小さな森があればかならず木陰で女が小説を書いている、とまで言われていた地域です。なかでも広く知られていたのはカーソン・マッカラーズ、ユードラ・ウェルティ、フラナリー・オコナーといった面々、それからその3人にも大きな影響をあたえていたキャサリン・アン・ポーターでした。そしてポーターを読みはじめたら、メキシコが出てきたのです。短編でいくつもいくつも繰り返し舞台にしているのです。ポーターはテキサスで育ちましたが、非常に古い秩序の中にある南部の雰囲気が息苦しくて、外に出たいという意識をつよく持っていた女性でした。複雑な家庭の事情もあって、自立の方法としてまずは16歳で結婚して家を出ます。しかし、数年後、結婚は破綻。それからは、恋多き女という異名をいただくほど何度も結婚をすることになりますが、南部という土地を離れてシカゴへ、そして1919年にニューヨークへと居を移します。その頃の彼女はまだ小説を書いてはいませんが、ジャーナリストで、ニューヨークで多くの作家や芸術家と交流をもちます。とくに親しくなったのがメキシコから来ていた芸術家たちで、故郷テキサスの南隣の土地だという親近感もはたらいたのでしょうか、メキシコに向かいます。そしてそこが気に入り、革命真っ只中のメキシコの状況についてアメリカのメディアに原稿を書くということを始めます。南部の息苦しさから出たいと思っていたポーターは、このあたりから、自分をコスモポリタンと考えたがるようになっていきます。

ポーターがメキシコに行ったのは1920年、オブレゴンが大統領のときでした。メキシコの革命は混乱がつづいてましたが、その混乱のなかで革命はどのように進んでいるのかという報告をアメリカの新聞に書き送りました。その実績がまもなく買われて、翌1921年です、メキシコ

シティで開かれた「メキシコのポピュラーアート展」というものをアメリカで開く企画のプロデュースを革命政府から頼まれます。当時はまだアメリカはメキシコの新政府を認めていなかったので、会場を探すのは大変苦労したようですが。1922年になんとかロサンジェルスで開催して成功させました。そしてその成功からしばらくして小説家としてデビューするんですが、当初の短編のほとんどはメキシコが舞台でした。メキシコは第二の故郷だ、と言ったこともあるし、1924年には、あるエッセイで、メキシコについてこう書いています。「メキシコではほとんどの鳥たちが、人間たちみんなが歌っている。自由に楽しげに、さながら天があたえてくれたような声で、いたるところでいつも歌っている。」

大学院生だったぼくは、えっ、メキシコ革命？　とおおいにあわて、無知だったぼくにとってはきわめてタイムリーだったと言うべきなんですが、翻訳書の新刊として出てまもない分厚いジョン・ウォーマック・ジュニアの『サパタとメキシコ革命』を購入したものです。読みはじめてすぐにメキシコ革命の複雑さに音をあげたのを覚えています。

今回のためにいろいろ資料を漁っているうち、そういえばこの作家もそうだった、と思い出したのがレイ・ブラッドベリです。『華氏451度』というディストピア小説でよく知られ、『火星年代記』はSFの古典になっている人気作家ですが、かれもまた、メキシコに魅了されたひとりでした。1945年、25歳のときです。新人作家として注目が集まっていて、いくつかのSF系の雑誌にかれの作品が載るようにもなっていて、最初の短編集がいよいよ刊行されようというときでした。友人に、メキシコに行かないか、と誘われます。ブラッドベリは大変な出無精です。偏食もすごくて、ハンバーガーしか食わないみたいなやつだったらしいんですね。だから、メキシコ？　ハンバーガーはあるの？　みたいにためらいはあったようですが、メキシコに行って、大きなショックをうけます。サム・ウェラーのブラッドベリ伝『ブラッドベリ年代記』のその箇所を読みます。

「メキシコはレイの心をかき乱した。経済は逼迫しており、レイは多くの人々に憎まれている気がした。裕福なアメリカ人と思われているからだ。彼はスペイン語が話せなかった。食べものはなじみがなかった。風景は異質で荒涼としていた。だが、それらにもまして、彼がなにより恐れるもの、彼の書くものの大半に浸透しているものが、いたるところにあるように思われた――すなわち、死が。メキシコの街をつぎつぎと通過するあいだに、レイとグラントは数多くの葬式に出くわした――けばけばしく飾りたてられた葬列、歳月をへた墓場へ向かっている陰鬱な家族の行進に。なによりレイを悩ませたのは、悲しみに打ちのめされた父親が、子供の柩を頭上にさしあげて進んでいる葬列だった。レイとグラントがメキシコの奥へ進めば進むほど、レイの恐れはつのった。一週間のうちに、手つかずの自然が残る緑のジャングル地帯へはいりこんでいた。レイは大自然に直面して心細さを味わった。車が故障したらどうなるだろう？　ふたりは、山刀（マチエテ）をふるう、血に飢えた先住民の話を地元民から聞かされていた。」（中村融訳、河出書房新社、2011年、pp.143-144）

つまり、自分が小説のネタにしたいと思っているものが全部ここにあるということで大変ショックを受けてしまったんです。こうなったらもうメキシコを意識せざるをえなくなるでしょ

う。

おまけに、かれをおどろかせるものがもうひとつ、メキシコには待っていました。メキシコシティで泊まった民宿の食堂で、朝からカクテルを2、3杯引っかけている、足元の怪しい長身の男に会います。その男は片目が青、片目が茶色の牧羊犬を連れていました。伝記にはそう書いてあるんですが、どういう目をした犬なんでしょうね。その男がスタインベックでした。さきほどお話しした*The Pearl*の映画の制作で何度もメキシコに来ていたんですが、そこに泊まっていたんですね。ブラッドベリも、ぼく同様になんていうと畏れおおいですが、スタインベックの『怒りの葡萄』の大のファンだったので、すっかり緊張してしまって、「ぼくも小説を書いてます」とはそのときはとても言えなかったそうです。

ともかく、そんなこんながあり、ブラッドベリにメキシコは強烈な印象を残したわけです。その後、なにかとメキシコを舞台にした作品を書くことになります。ひとつ、とても短い作品でまったくSFではありませんが、いかにかれがメキシコに惹かれていたかということを印象的に語っている短編があるので紹介します。*Calling Mexico*という、メキシコに電話をするというお話です。

「大佐」と呼ばれている死期が迫っているアメリカ人の老人が、いまはアメリカの田舎に住んでいるんですが、昔長いことメキシコシティで暮らしていたので、かつてかれに仕えていたメキシコシティにいるメキシコ人の召使いに電話をかけます。そして相手が出てくると、「窓を開けて、そこに受話器をもっていってくれ」と言うんですね。こういうことを「大佐」はときどきやっていたんですが、でも、介護をしている看護師は、そういうことをすると興奮して脈があがるからやらないように、と注意しています。それを無視して、ベッドから車椅子に自力でおりては電話のところに行ってメキシコに電話をしているわけです。電話の向こうから聞こえてくるのはまずは窓を開ける音です。それから焼きバナナ売りの音、車のブレーキの音、マリンバの音、カットフルーツを売る声などが聞こえてきて、そのうち、「大佐」は大きく鼻をふくらまします。タコス屋の肉を焼く様子が目に浮かんでくるからです。

「大佐」は安静でいなければいけない。ですから、看護師は、いっこうに言うことをきかない「大佐」に怒って車椅子を部屋の外に持っていってしまいます。「なんでそんなことをする？　元気になって死んでいくんだとしたらそれでいいじゃないか」と「大佐」は文句を言いますが、無視されます。「大佐」にとっては、メキシコの音を聞くことが元気の素なのですね。

車椅子を取りあげられても「大佐」はめげません。ベッドから降りて床を這いずって電話のところに行き、メキシコシティの召使いに電話をします。そして「窓を開けろ」と言い、メキシコの音に耳をかたむけます。街角のオルガン弾きの音、宝くじを売る男の子の声などが聞こえてきます。そして「べつな陽の光のもとにいる数千人」の姿を思い描きながら、床に突っ伏して死んでいきます。

それからしばらくして、曾孫たちが部屋に入ってきます。安静にしていなくてはいけないので「大佐」の部屋に入ってはいけないことになっているんですが、ちょっと心配になって入ってきたんです。すると、「大佐」が倒れていて、すぐ脇に受話器がある。曾孫のひとりが受話器を耳にあてると、なにか変な冷たい音が聞こえます。曾孫にはなんの音か、どこから届いてい

るのか見当もつきませんが、2000マイル離れたところで窓が閉まる音でした。

みごとなエンディングのうまい短編ですね。それに、メキシコシティで暮らす人々が作り出す音みたいなものへの愛着がじつによく現れています。さきほど紹介したポーターの文章――「メキシコではほとんどの鳥たちが、人間たちみんなが歌っている。自由に楽しげに、さながら天があたえてくれたような声で、いたるところでいつも歌っている」――に通じるものがあるようにも思えます。ポーターの言う「歌」には、革命の熱気につつまれている人々のさまざまな声といった意味合いがつよくあったのかもしれませんが、人々が作り出すふつうの日常の音もそこにはふくまれていたでしょうから。

ところで、大学生のときに英語で最後まで読み通した小説のなかに、ジャック・ケルアックの『オン・ザ・ロード』があります。当時はユダヤ系やアフリカ系の文学がおおいに注目を集めていた時期だったとさきほど言いましたが、1960年代後半はヒッピーなどが出現しはじめていた、いわゆるカウンターカルチャーが台頭してきたときでもあり、その源流として1950年代のビート・ジェネレーションの作家たちの作品や行動にも広く関心がもたれていました。『オン・ザ・ロード』は「ビート・ジェネレーションの聖書」とまで言われていた本ですので、時代の雰囲気に流されやすいハイティーンのぼくは素直に読みはじめ、そしてすっかり夢中になりました。けっこう英語は破天荒ですし、アメリカの地図が頭に入っていないと十分楽しめない作品でもあるので、いま思うと、どのぐらい理解していたかは分かりません。ただ、読みながらアメリカって広いなあ、自由に動き回っているなあ、というかんじで読み、その広さと動きに圧倒されていたんだと思います。

その『オン・ザ・ロード』にメキシコが出てきていました。メキシコまで旅をするパートがあるということは最初にお話しした通りですが、じつは、それだけではなくて、メキシコ人が重要な人物として登場しています。

『オン・ザ・ロード』の原稿はかなり早くに書き上げられていたのですが、なかなか出版されませんでした。本として刊行されたのは、原稿ができあがってからずいぶんたった1957年ですが、その2年前、原稿の一部が『パリ・レヴュー』という雑誌に掲載されました。季刊の文芸誌ですが、それの1955年の冬号に載ったんです。タイトルは“The Mexican Girl”、すなわち「メキシコ人の女」。このパートは、『オン・ザ・ロード』の第一部の第十三章になるんですが、けっこう長いもので、メキシコ人女性との短く熱い恋物語です。このメキシコ人女性はカリフォルニアに暮らす貧しい移民の女性ですが、 ケルアックがじっさいに心底惚れた女性のひとりでした。断わっておかなくちゃいけませんが、ケルアックの作品はほとんどがほぼ自伝的なんです、自分が体験したことを書いているんですね。ケルアックはものすごいメモ魔で、見たこと聞いたことすべてをなんでもかんでも記録していて、手元に白い紙があればそれに、白いのがなければ新聞の上にでもメモしてしまうというようなひとでした。新聞の上に書いて後で判読できるのかとぼくなんかは思いますが、そういうことじゃないんでしょうね。きっと書くことが大事なのであって、まあ、書く機械、ライティング・マシーンだったんじゃないかと思います。

長距離バスのなかで口説いて、それからしばらくロサンジェルスでいっしょに過ごし、あげくはカリフォルニアの田舎の彼女の家の近くに住みつき、見よう見まねで綿花摘みを手伝った

りするというような、じつに充実した愛の生活をおくります。彼女の親戚たちともいっしょに酒を飲んだりの付き合いをして楽しく過ごしますが、言うまでもなく、そのあいだはメキシコ人たちに囲まれています。ケルアックは東部の出身で、現在の東部ならともかく、当時はそのあたりはメキシコ人はそんなに身近な存在だったとは思えませんので、メキシコ人に慣れていたということはないでしょう。要するに、むちゃくちゃに一目惚れしてしまったんでしょうね。一時は、綿花摘みを彼女といっしょにやりながら、地についたこういう暮らしをずっとつづけるのもいいかもしれない、と本気で考えたりしています。『パリ・レヴュー』にはこのパートだけが掲載されたのですが、独立した一編として読んでも十分に心動かされる恋物語になっています。

彼女との濃厚な愛の生活のあと、ケルアックはメキシコにちょくちょく出かけるようになります。たいがい目的地はメキシコシティです。なぜメキシコシティかというと、友人のウィリアム・バロウズがいたからです。バロウズというひとは、ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、ご飯を食べるよりもドラッグが大好きな、筋金入りの頑健なジャンキーで、メキシコにいるのはそこだとドラッグが手に入りやすいからでした。もっと強いドラッグを求めてペルーとかコロンビアまで出掛けたりもしていました。*The Naked Lunch*、つまり「裸のランチ」という、ドラッグによる酩酊から生まれたような、かなり不気味な作品も書いていますが、そんな変な題名を思いついたのはケルアックでした。ドラッグが簡単に手に入るからということもあったのでしょう、バロウズもメキシコが大好きで、ある本のなかでは、ぼくのノスタルジアはすべてメキシコに向かう、とまで書いています。

メキシコに行くと、じゃあ、ケルアックもバロウズにつられてドラッグ漬けになっていたのかというと、そこはお付き合い程度にとどめていたようで、お酒のほうがもっと好きでした。じっさい、最終的には酒の飲み過ぎで亡くなっちゃうんですから。

でも、メキシコに行くと、バロウズはもちろんのこと、まわりにたくさんジャンキーがいたのは事実です。そのなかには、ヘビーなジャンキーの女性もいて、カリフォルニアで愛の生活をおくった女性以来の二人目のメキシコ人女性ということになるんでしょうか、すっかり惚れてしまいます。ケルアックはジャンキーではありませんから、彼女にしてみれば、ケルアックは少々煙ったい存在なのですが、恋は盲目、ケルアックはアプローチをやめません。結果、彼女への思いをつづった『トリステッサ』っていう小説が生まれますが、それを読んでいると、彼女への愛はメキシコへの愛と一体なのではないかと思えるくらい、彼女が住んでいるメキシコシティの貧しい地区の雰囲気が、その匂いまで感じさせるような筆致で書かれています。この本もぼくが翻訳しました。

この女性と知り合ったとき、ケルアックは年老いたジャンキーのアパートに間借りしていました。このじいさんは、若い頃はとんでもなくヘビーなジャンキーだったらしいんですが、ケルアックが居候していたときはほとんど半病人で、ときどきわけのわからないことを寝床で口にするような状態になっていました。ケルアックはそんなかれのおむつを替えるようなこともしていたようなのですが、そうしていると、半病人の元ジャンキーがぼそぼそとなにかしゃべる。ケルアックはだんだんそのぼそぼそ語りに心を奪われます。なんだかおもしろそうなこと言っ

てるぞ、というふうに。そして、なにしろメモ魔ですから、それをノートに書き留める。それだけではなく、そのぼそぼそ語りを聞いているうちに自分のなかに浮かんできた言葉も書き留める。つまり、老ジャンキーの半病人の男とケルアックのいわば掛け合いの記録がそこに残るんですね。

ジャズが大好きだったケルアックはそれを、ふたりのジャムセッション、とよく言っています。そしてそのふたりのジャムセッションはやがて1冊の本としてまとまります。それが『メキシコシティ・ブルーズ』という詩集で、1959年に刊行されました。全部で242の短い詩から成っている、なかなかに読解が困難な作品です。ぼそぼそ語りから誕生したんですからね、なにを言ってるのかわからない。それに反応しているケルアックのほうの言葉もこれまたなにを言ってるのかわからない。わからないづくしなんですが、妙にこころに残る。独特の映像が浮かぶ。ひとつだけ、ぼくが訳したものを読んでみます。ついこのあいだジム・ジャームッシュの『パターソン』という詩人についてのおもしろい映画を観ていましたら、「詩を翻訳で読むのはレインコートを着てシャワーを浴びるようなものだ」と永瀬正敏演じる日本人の詩の研究者が言ってました。ですから、これから読むぼくの翻訳を聞いていただいてもレインコートを着てシャワーを浴びるようなものかもしれませんが、ともかく読みます。

230番目のコーラス

ジャック・ケルアック

愛の無数の墓場で
　腐敗がすすむ、
こぼれたミルクはヒーローたちの不始末だ、
ぼろぼろになったシルクのスカートは
　砂嵐のしわざだ、
愛撫するヒーローたちは目隠しされて柱につながれている、
殺人の犠牲者たちはここで生きることを許される、
頭蓋骨は指や関節と物々交換をする
ぶるぶると震える肉はやさしい象たちのもので
　ワシたちに食いちぎられる、
こわれやすい膝頭の想念、
ネズミへの恐怖がバクテリアとしたたる、
ゴルゴダのコールドな希望はゴールドな希望、
ぬれ落ち葉がはりつくのは
　木の船、
タツノオトシゴのこわれやすいすがたはゼラチンでできている、
センチメンタルな「アイ・ラブ・ユー」はもはやない、
長らく野ざらしにされて汚れ切った死、

不気味で幻惑的でミステリアスな生き物たちは
　おのれのセックスをかくす、
ブッダの衣装が冷凍されて
　見えないほど薄く切りとられているのは
北の死体安置所だ、
ペニスの林檎がおとろえてきた、
切られた喉頸が砂粒よりも多い――
　　いとしの子猫の腹にキスするかのように
　　やわらかさがわれらの報酬。

ぜんぜんわかりませんね。でも、読みようによっては、このところメキシコの北部で頻発している凄惨な殺人とか、いわゆる不法移民が国境を越えた先の砂漠で迎える非業の最期を予言しているようなところもあって、背筋が凍えます。ともかく、こういう短い詩があつまったのが『メキシコシティ・ブルーズ』です。

以上、ぼくの前にチラチラとメキシコの姿をみせていたUSAの文学のいくつかを紹介してきましたが、こんなふうにメキシコの影が少なからずぼくに忍び寄ってきていたというわけです。でも、スペイン語をすこしは勉強したほうがいいかもしれないなと思うようになったのは、いまあげたような、どちらかというと時代的には少々前の作家たちのせいではありません。翻訳の仕事を始めてすこし経って、同時代の作家たちの作品を意識的に読み始めるようになったころ、かれらの作品のなかにスペイン語がチラチラ姿を見せはじめていることに気がついたのです。メキシコの影ではなく、文字通り、スペイン語が姿を見せはじめた。これはスペイン語だな、と見当はつくんですが、意味はわからない。

そして1990年代に入ると、ラテンアメリカから来た移民やその二世や三世が英語で小説を書くようになります。そこには当然のようにスペイン語が混じってきます。1990年、キューバ系のオスカー・イフェロスが『マンボ・キングズ、愛のうたを歌う』という小説でピュリツァー賞を取りました。そのあたりからですね、ぼくはアメリカの文学風景はスペイン語を軸にして変わるんだ、と思い、危機感というとちょっとおおげさですけど、あわてました。

しかも、ラテンアメリカ系だけではなくて、そうではない作家たちまでもが、アメリカの風景の変化に反応してのことでしょうね、スペイン語を作品の中にとりこむようになってきた。ぼくがマークしていた作家のひとりにジョン・セイルズっていう作家がいて、「アナーキスト大会」というかれの短編を翻訳したりもしていたのですが、そのセイルズが、なんと、*Los Gusanos*というスペイン語のタイトルの長編を発表したんです。1991年のことでした。「ウジ虫たち」という意味であることはスペイン語の辞書を引いてわかりましたが、作品のなかにもどんどんスペイン語が出てくる。おどろいた、というか、たじろぎました。

そしてもうひとり、ぼくの好きな作家で、「血の雨」とか「名犬ラッシーの真相」といった奇想に満ちた短編をぼくが訳してもいたT・コラゲッサン・ボイルが、*The Tortilla Curtain*という

長編を出したんです。1995年のことでした。トルティーヤですよね、メキシコの主食の。舞台はロサンジェルスで、メキシコからの不法移民の話でした。作品のなかにもちょろちょろスペイン語が出てきました。

セイルズもボイルもアイルランド系です。そういう面々までも作品のなかにスペイン語を入れてくるという事態に、ぼくはほとんど絶句し、USAの小説とこれからも付き合っていくためにはスペイン語も勉強しなきゃな、とわりあい本気で思うようになったのです。

ボイルには、かれが日本にきたとき、会いましたが、「スペイン語、できるの？」と訊いたら、「できるよ、数年前にマスターした」と軽く言われてしまい、ショックをうけました。セイルズにも会ったことはありますが、そんな質問はしませんでした。でも、かれは、スペイン語ができるなんてもんじゃなくて、いまやもうスペイン語のひとです。かれは、昔から映画も非常に積極的に撮っている、多才というか、ほとんど天才なのですが、1997年には*Hombres armados*という、これまたスペイン語のタイトルの映画をつくりました。アメリカでは*Men with Guns*という英訳したタイトルで公開されたようですが、なかはぜんぶスペイン語です。脚本はぜんぶセイルズが書いています。昔から、小説でも映画でも、素晴らしい耳の持ち主で台詞を書かせたら超一流、という評判を得ていたひとですが、スペイン語の台詞も楽々書けてしまうんですね、すごいです。

ともかく、USA文学は、20世紀の終わり頃、こんな具合になっていました。そして2000年です。まさに世紀の変わり目に行われたアメリカの国勢調査でメキシコ人をふくむラテンアメリカ系、いわゆるヒスパニックの人口が黒人を追い抜きました。ヒスパニックが最大のマイノリティーになったんです。そして2004年、ヒスパニックがアメリカでは大事な存在になっていることを示す映画がつくられました。*Un día sin mexicanos*というもので、英語のタイトルは*A Day without a Mexican*、つまり「メキシコ人のいない1日」。監督はセルヒオ・アラウというメキシコ人です。コメディですが、ドキュメンタリーの形を取っているので、ドキュコメディーなどとも呼ばれています。ある日突然、ピンクの霧が空に現れて、その夜から忽然とメキシコ人たちが姿を消してしまうという話です。カリフォルニアの人口の三分の一がメキシコ人なのですが、メキシコ人の庭師や子守やコックや警官やメイドや教師や農業労働者、建設労働者、エンターテイナーやアスリートや保育士などがぜんぶいなくなっちゃう。したがって町の機能が完全にストップしてしまうという、そういう話です。トランプ大統領はこの映画を見ているんでしょうか。メキシコ人を排斥したがっていますが、それでアメリカは大丈夫なんでしょうか。

ともあれ、すこしスペイン語を勉強しないと英語のUSA文学とはこれから付き合っていけない、それだけはたしかなように思います。

これで終わります。ありがとうございました。

〜〜

司会　では最後に共催者からのご挨拶を松原宏之先生にお願いします。

松原　アメリカ研究所所長の松原でございます。ラテ研のイベントに共催のかたちで加われるのは久しぶりのことで、うれしく思っております。来年（2018年）2月には、今度はアメ研主催

の研究会をラテ研に共催いただきます。このような連携が増えて、またたくさんのみなさまにお越し頂けますよう願っております。

青山先生、今日はありがとうございました。アメリカ文学（「USA文学」！）の青山先生のスペイン語体験のお話をラテ研でなさるという卓抜な企画でした。正直に申しますと、わぁやられたと思いました。英語だけでは、南北アメリカ大陸の全貌を語ることができないのはもちろんのこと、アメリカ合衆国すらも見通すことができません。なかでもスペイン語は必須ですよね。今日のお話からも本当によくわかるように、スペイン語なくしてアメリカ研究もない。大変勉強になりました。

こうした意欲的な企画に、これだけたくさんの皆様がいらっしゃることをとても心強く思いました。お越しいただきましたこと、誠にありがとうございました。重ねて御礼申し上げます。

映画作品一覧

Buena Vista Social Club　Wim Wenders監督　1999年　105分　独・米・仏・玖

The Forgotten Village　Herbert Klein & Alexander Hammid監督　1941年　68分　米

La perla（*The Pearl*）　Emilio “Indio” Fernández監督　1947年　85分　墨

Viva Zapata!　Elia Kazan監督　1952年　115分　米

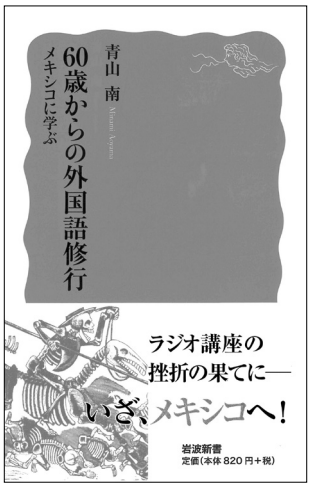
Paterson　Jim Jarmusch監督　2016年　118分　米・仏・独

The Mambo Kings　Arne Glimcher監督　1992年　106分　米・仏

Hombres armados / Men with Guns　John Sayles監督　1997年　128分　米

Un día sin mexicanos / A Day without a Mexican　Sergio Arau監督　2004年　100分　米・墨

（あおやま　みなみ　早稲田大学文学学術院教授、翻訳家、エッセイスト）



立教大学図書館所蔵　青山南著訳書リスト

《著書》

『ピーターとペーターの狭間で』 本の雑誌社　1987

『外人のTOKYO暮らし』 朝日新聞社　1989

『世界の文学のいま』（共著） 福武書店　1991

『翻訳家という楽天家たち』 本の雑誌社　1993

『小説はゴシップが楽しい』 晶文社　1995

『木をみて森をみない』 同文書院　1995

『英語になったニッポン小説』 集英社　1996

『アメリカ深南部』（橋本功司・写真） 日本放送出版協会　1996

『アメリカ短編小説興亡史：とめどもなくあらわれるアメリカの短編小説をめぐる、めどもなくあられもない断片的詳説』 筑摩書房　2000

『この話、したっけ？：インターネットでこんなに読めるアメリカ文学』 研究社出版　2001

『南の話』 毎日新聞社　2001

『ネットと戦争：9.11からのアメリカ文化』 岩波書店　2004

『マンガ名作講義』（共著） 情報センター出版局　2005

『短編小説のアメリカ52講：こんなにおもしろいアメリカン・ショート・ストーリーズ秘史』 平凡社 2006

『旅するアメリカ文学名作126』（編著）（長崎訓子・画） エスクァイアマガジンジャパン　2009

『60歳からの外国語修行：メキシコに学ぶ』 岩波書店　2017

《訳書》

ジョン・ドス・パソス 『さらばスペイン』 晶文社　1973

フィリップ・ロス 『われらのギャング』 集英社　1977

フィリップ・ロス 『素晴らしいアメリカ作家』 集英社　1980

フィリップ・ロス 『ゴースト・ライター』 集英社　1984

カルヴィン・トムキンズ 『優雅な生活が最高の復讐である』 リブロポート　1984

レナード・コーレン 『西海岸共和国だより』（構成・訳） 筑摩書房　1984

トム・ウルフ 『そしてみんな軽くなった：トム・ウルフの1970年代革命講座』 大和書房　1985

ジーン・スタイン, ジョージ・プリンプトン 『イーディ：'60年代のヒロイン』（共訳） 筑摩書房　1989

『世界は何回も消滅する：同時代のアメリカ小説傑作集』（編訳） 筑摩書房　1990

リリアン・ロス 『パパがニューヨークにやってきた』 マガジンハウス　1992

ゼルダ・フィッツジェラルド 『ゼルダ・フィッツジェラルド全作品』 新潮社　2001

ビル・コールマン 『“シンプル”という贈りもの：アーミシュの暮らしから』 フレックス・ファーム 2002

エルマズ・アビネイダー他 『私たちはなぜアメリカ人なのか：15 reflections』 ゆまに書房　2003

ジャック・ケルアック 『オン・ザ・ロード』 河出書房新社　2007

レイチェル・ロドリゲス 『ひらめきの建築家ガウディ』（ジュリー・パシュキス・絵） 光村教育図書 2010

ジャック・ケルアック 『トリステッサ』 河出書房新社　2013

『作家はどうやって小説を書くのか、じっくり聞いてみよう！』（編訳） 岩波書店　2015

『作家はどうやって小説を書くのか、たっぷり聞いてみよう！』（編訳） 岩波書店　2015